幼児における反事実的思考と感謝理解の関連

中道圭人

(静岡大学教育学部)

キーワード：就学前児，反事実，感謝

The relationship between counterfactual thinking and gratitude understanding in preschool children

Keito NAKAMICHI

(Faculty of Education, Shizuoka University)

Key Words: preschooler, counterfactual, gratitude

目 的

反事実的思考とは“過去に生じた出来事や行為に対して別の可能性を考えること”である。この思考は、心の理論などとも関連する幼児期の重要な認知である(Beck & Riggs, 2014)。近年、反事実的思考によって生じる感情(例：後悔、安堵)や、道徳的判断との関連への関心が高まっている(Byrne, 2016)。本研究では、この反事実的思考と関連する感情として「感謝感情」に注目し、幼児期における反事実的思考と感謝理解の関連を検討した。

方 法

参加児：公立こども園の年中児 16 名(女 8; $M = 62.38$ か月)、年長児 16 名(女 8; $M = 73.50$ か月)の合計 32 名。

課題・手続き：本研究の手続きは、静岡大学の研究倫理委員会によりレビューされ、承認された。すべての参加児が園内の静かな部屋で、反事実課題 3 問と感謝理解課題 4 問を個別に実施された(時間=20 分程度)。両課題の提示順は参加児間でカウンターバンスされ、課題内での問題の提示順はランダムにされた。

反事実課題では、中道(2014)で使用された 3 つの物語(風吹き物語、ボール物語、塗り絵物語)を用いた。いずれの物語も「初期状態⇒原因事象⇒結果状態」という共通の構造を持っていた(例：少年が庭で絵を描く⇒強い風が吹く⇒絵が樹上に飛ぶ)。課題では、参加児に紙芝居形式で物語を読み聞かせた後、まず *Now* 統制質問(物語の最後の状況に関する質問)、*Before* 統制質問(物語の最初の状況に関する質問)をランダムな順で尋ねた。その後、反事実質問(もし原因事象が異なっていたら、結果状態はどのようになっているか?)を尋ねた。

感謝理解課題では、Nelson et al. (2013)を参考に 4 つの物語を作成した。4 つの物語は「A. 主人公に援助が必要な場面⇒B. 援助者が主人公を助ける場面⇒C. その後、援助者が困る場面」という共通の構造を持っていた(例：主人公は絵を描こうとするが、クレヨンが無い⇒友達が主人公にクレヨンを貸す⇒次の日、友達のスcoopが無くて困る)。課題では、参加児に紙芝居形式で物語を読み聞かせながら、4 つの質問を尋ねた。具体的に、主人公が援助者から助けられた場面(上記の B)の後、「主人公はどのような気持ちか」(Q1: 直後の感情)を“すごく嬉しい〜すごく嫌”の 4 段階で、「援助者をどれくらい好きか」(Q2: 好意度)を“すごく好き〜すごく嫌い”の 4 段階で尋ねた。続いて、援助者が困っている場面(上記の C)の後、「援助者が困っているのを見た際の主人公の感情」(Q3: 困り後の感情)を 4 段階で、「援助者を助けるか」(Q4: 返報有無)を“助ける・助けない”の 2 件法で尋ねた。

得点化：反事実課題では、2 つの統制質問に正答し、反事実質問に正答した場合に 1 点を与え、3 問の合計(反事実得点)を算出した。感謝理解課題では、まず「Q1: 直後の感情」「Q2: 好意度」「Q3: 困り後の感情」それぞれに関して、4 つの物語の平均点を算出した。また、各物語での質問への反応が「援助後に主人公にポジティブ感情が生じ、援助者に好意を抱く(Q1・2 が 3 点以上)。援助者の困り状態を認識した後、主人公にはネガティブ感情が生じ(Q3 が 2 点以下)、返報行為を行う」に当てはまる場合に 1 点を与え、4 問の合計(高度な感謝理解得点)を算出した。

結 果

学年による反事実思考の違い：反事実得点を用いて t 検定を行ったところ、年中児($M = 1.75$, $SD = 1.06$)と年長児($M = 2.00$, $SD = 0.89$)の得点に違いはなかった($t(30) = 0.72$, ns)。

学年による感謝理解の違い：感謝理解課題での Q1-Q3 の得点と高度な感謝理解得点を Table 1 に示す。各得点を用いて t 検定を行った。その結果、「Q3: 援助者の困り後の主人公の感情」で有意な違いが見られ($t(30) = 2.44$, $p = .02$, $d = 0.89$)、年中児より年長児の得点が低かった。Q1・Q2 の平均得点と高度な感謝理解得点では有意な違いは見られなかった。また、「Q4: 返報有無」では、すべての参加児が「助ける」と回答した。

反事実思考と感謝理解の関連：反事実課題と感謝理解課題の遂行の関連を検討するため、Pearson の相関係数と偏相関係数(制御変数=学年、月齢)を算出した(Table 2)。その結果、反事実課題の遂行と「Q1: 被援助直後の主人公の感情」および高度な感謝理解得点に有意な正の相関が見られた。また、学年・月齢を統制した場合でも、その有意性は保持されていた。

考 察

反事実的思考は「被援助直後の主人公の感情」や高度な感謝理解と関連した。“もし援助者が助けてくれなかったら...”という反事実を考えられることは、援助に対するポジティブ感情をもたらし、それが高度な感謝理解へと繋がっていくのかもしれない。

Table 1 感謝理解課題の得点(括弧内はSD)

	Q1: 直後の感情	Q2: 好意度	Q3: 困り後 の感情	高度な 感謝理解
年中児 ($n = 16$)	3.06 (0.78)	3.78 (0.38)	3.42 (0.55)	0.50 (0.63)
年長児 ($n = 16$)	3.08 (0.80)	3.78 (0.33)	2.92 (0.60)	0.69 (0.70)

Table 2 反事実課題と感謝理解課題の関連
(括弧内は学年・月齢を制御変数とした偏相関)

	Q1: 直後の感情	Q2: 好意度	Q3: 困り後 の感情	高度な 感謝理解
反事実 課題	.57 ** (.43 *)	-.11 (-.01)	-.04 (.22)	.47 ** (.37 *)

* $p < .05$ ** $p < .01$

引用文献

- Beck, S. R., & Riggs, K. J. (2014). Developing thoughts about what might have been. *Child Dev Perspect*, 8, 175-179.
 Byrne, R. M. J. (2016). Counterfactual thought. *Annu Rev Psychol*, 67, 135-157.
 中道圭人 (2014). 幼児における反事実的思考とふり能力の関連. 静岡大学教育学部研究報告, 64, 101-111.
 Nelson, J. A. et al. (2013). Preschool-aged children's understanding of gratitude. *Brit J Dev Psychol*, 31, 42-56.

付記：本研究は科研費(課題番号 15K17269)の助成を受けた。